中興俊源大徳忌法要厳修

十月四日

去る十月四日、高尾山中興第二世・俊源大徳様の御遺徳を偲ぶ**中興俊源大徳忌**が、四天王門脇の俊源大徳像前にて執り行われました。

俊源大徳様は永和年間（一三五七～一三七八）に京都醍醐山より高尾山に入山して、八千枚の御護摩供を修法された後、現在お祀りされている御本尊・飯縄大権現様を勧請し、当時荒廃していた薬王院を中興されました。

被災地総記復興　国土安穏
三社寺合同復興祈願祭

九月二六日

去る九月二十六日、北口本宮冨士浅間神社と大山阿夫利神社、高尾山薬王院の三社寺は、北口本宮冨士浅間神社にて、東日本大震災被災地の復興祈願祭を行いました。

平成二十三年より始まったこの復興祈願祭は一年毎に営まれており、三社寺による輪番制となっております。

冨士浅間神社の上文司宮司斎主のもと行われた祈願祭では、祝詞の奏上や読経が行われる神仏融合の祈りの中、被災地復興を祈る静かな一時となりました。

被災地の早期復興への祈りが捧げられた

第十二回高尾山健康登山
親睦会の集い

去る九月三十日（土）、第十二回高尾山健康登山親睦会の集いが行われ、およそ百名の会員の皆様が参加された。

波多野重雄会長と佐藤秀仁僧正による御挨拶により開会され、昼食を召し上がった。

その後はフルート演奏を鑑賞し、会場は大いに盛り上がった。

フルートの爽やかな音色に聞き入る聴衆

おはなし散歩道

もみじと小天狗

町田市　大澤桃代

小天狗はもみじの枝から、幼稚園の庭を眺めていました。小天狗はよくこの園に来ています。

園庭ではミカちゃんとタッくんが遊んでいました。二人はママのお迎えを待っています。お友だちは皆帰ってしまいました。もみじの葉っぱが赤く染まり、少しずつ散り始めていました。

「きれいな葉っぱ！」

ミカちゃんが葉っぱに気がつきました。

「本当だ、集めよう！」

二人は葉っぱを拾いました。「タッくんの分」「ミカちゃんの分」

「ママの分」とつぶやきながら。

「パパの分がないわ」

「チエミ先生のも、園長先生のもないよ」

二人はもみじの木を見上げました。

「風、吹かないかな」

「風吹けーっ、吹けーっ」

口々に叫びます。

「お願い吹いて！」ミカちゃんが空を見上げます。

小天狗は、ドキッとしました。ミカちゃんと目が合った気がしたのです。

それでも、すぐに天狗の団扇を出して、もみじの枝をあおぎました。

とたん、ヒューン！

と強い風が起こって、葉っぱが庭のあちこちへ散らばってしまいました。小天狗は団扇を使うのが、まだ上手ではないのです。

ミカちゃんとタッくんは、嬉しそうに葉を追いかけて園庭を走ります。

「パパの分！」

「チエミ先生の分！」

二人はもみじを拾いながら、砂場へやってきました。砂場には、赤い葉が一枚落ちています。

タッくんが、葉っぱに手を伸ばしました。

「園長先生の分！」

あっ、と思った時にはもう、タッくんは砂場の縁に足をかけて、ドスン！と転んでいました。

「だいじょうぶ？」

うん、砂を払いながらタッくんが立ち上がります。わあっ！　ミカちゃんが目を丸くしました。砂にくっきりと手の跡がついていたのです。

「タッくんの手って、もみじみたい！」

ミカちゃんはタッくんの手形の横に、自分の手形を押します。砂場に二つの手形が並びました。

「もみじ、もみじ！」

二人がはしゃいでいると、

「あら、きれいな手形！」

チエミ先生が来ました。

二人のママも、園長先生も砂場にやって来ました。

「ママ、きれいな葉っぱ！」

ミカちゃんがママにもみじの葉っぱをあげました。チエミ先生にもあげました。タッくんもママに葉っぱをあげました。

「あら。ここにも、もみじ」

園長先生が、砂場の葉っぱを見つけました。

「それ、園長先生の分！」

タッくんが、葉っぱを園長先生にわたしました。

「ありがとう、きれいな葉っぱね。二人の手形ももみじみたいね」

園長先生が言うと、チエミ先生もママたちもうなずきました。手形は明日まで残しておくことにしました。

園庭に誰もいなくなると、小天狗はそっと庭に下り立ち、砂場のシートをめくりました。

次の日、ミカちゃんとタッくんは、朝一番で幼稚園に来ました。手形を早く見たかったからです。

砂場では、チエミ先生がしきりに首を傾げています。

「先生、どうしたの？」

かけよると、その訳がわかりました。二人の手形の横に、もう一つ小さな手形があったのでした。

「誰の？」と子どもたちが次々やってきて、不思議そうに手形に手を合わせますが、やっぱり小さすぎます。

もみじの葉がひらひらと舞い落ちます。皆、葉っぱを追いかけ園庭を走ります。

ふふふっ、と笑い声が聞こえた気がして、ミカちゃんが空を見ました。団扇を持った小天狗が見えました。

あれっ？と、ミカちゃんが瞬きをすると、小天狗はもういませんでした。

（さし絵・小出　茂）